
All Of The World ~それが総ての始まり~

流星群

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A 11 O f T h e W o r l d s それが総ての始まり

【著者名】

N 1 5 6 3 Z

【作者名】

流星群

【あらすじ】

膨大な魔力が注がれた釜 ? 黄金釜 (a 11 o f t h e w o r l d) ? 。この釜が母胎に埋め込まれている少女を狙い、様々なかな?願望?を持つ人間、あるいは?運命?の手先 ? 体現者?も奪うために襲撃する中、主人公は命を賭けてヒロインを護り通す、バトル中心の物語

【プロローグ】～始まりの刻～（前書き）

『まずは作者からの一言』

今作の作品は初めてここで投稿したもので、途中までしか書いておりません。ですが、感想をくださるとありがとうございます。読みにくいところや、誤字脱字等もあつたら教えてください。

ちなみに、今話題の某魔術物に似てるかもしません。結構影響を受けましたので。そこを差し引いての評価をしてくれればありがたいです・・・。

【プロローグ】～始まりの刻～

それは雪が深々と降り続く真冬の夜の出来事だった。

濃い闇を照らし出したのは、雲一つない空から落ちてきた雷。一度ならず、二度三度と雷がその屋敷だけを集中的に狙う。

数秒の後、家から火の手が上がった。小さな火の元は木材に移るごとに勢いを増してき、あつという間に炎が家を覆つた。

轟々と燃え盛る火柱は天にまで昇る。炎は木材を黒い炭に変え、家中に取り残された人間たちを原型がなくなるまで焼き尽くした。家から飛び火し、雪の積もっていた路面を溶かす。

あらわになつた道路は、冬の間、本来の道として使われていなかつたことがわかる。

熱い。臭い。苦しい。人々の苦痛の叫び声が、眠つたように

静かな夜に響く。

全識衛護と全識宿和やまと、そして全識一族の長であり衛護の父である全識重しげるの三人は外に出て、少し離れたところから屋敷が倒壊していく様を眺めていた。

炎に巻き込まれずに済んだのは、重が衛護と宿和を連れ出してくれたからだ。

「これは、一体……？ 魔術師が襲ってきたんですか？」

「いいか。衛護、宿和。俺の話をよく聞け。今すぐここから離れろ！ 隣町じゃなく、もつと遠くだ。出来れば、こんな片田舎な場所じゃなく、人が沢山いるところへ行け。じゃないと、お前らは奴にすぐに見つかってしまう……！」

衛護の疑問は父の切迫した声で打ち消されてしまった。

普通の人間だったら、恐怖で我をも忘れて逃げ出していただろう。だが、衛護は違つた。幼い頃から全識一族の厳しい修行に耐え、肉体だけでなく精神まで鍛え抜かれている。

いかなる出来事も冷静に判断して、最善の手立てを瞬時に考え付

くよう育てられていた。

だから家が燃やされ、親族が殺されたとしても取り乱したりしない。

「奴は、宿和の母胎にある？ 黄金釜（gold of the world）？」を狙いに来た。衛護、お前は宿和を護り通せ。絶対に宿和を誰の手にも渡してはならない。自分の命を擲つても宿和を護衛し続ける。それがお前に課せられた今回……いや、死ぬまで終わらない役目だ」

重は、覚悟を決めた一人の魔術師の目をしていた。

肩幅の広い衛護の肩を、彼は大きな手で掴み、宿和を頼む、と小さく漏らす。

「これを……。お前に何もしてやれなかつたが、残せるモノはどうにか持つてこれた」

そう言つて重は衛護に全識家の家宝、鞘に収まつたままの？ 永久無銹の新鮮刀ラストフレイド？ を、懐から取り出し渡した。

永遠に鋒がないと謳われている名刀の中の名刀。刃渡りは優に一メートルを超える大物。名工が造り出したこの刀は魔刀まとうと呼ばれ、普通の刀とは違ひ魔術専門の武器である。魔術武装は、魔術を送り込むことで真価を發揮する特殊な武器。

全識家の秘宝でもあるその刀を衛護は握り締める。無念を懷いて死んでいった一族の想いが手に重く圧し掛かった。鞘に付いていた紐を肩に通して掛ける。

更に重は携帯していた二丁の自動式拳銃を受け渡した。一つはデザート・イーグル。もう一つはサイレンサーとレーザー・ポインター付きスミス＆ウェッソン。どちらの拳銃も重が名工に頼んで改良してもらつた魔術武装。それら二つの武器は衛護の父である重の愛用品で、彼の命より大事な物である。

ホルスターに入つていた二丁の拳銃を受け取り、衛護は左右の腰に取り付けた。しつくりときた拳銃との相性は、まるで元から衛護の物だつたかのよう。

「お前に魔術武装を託す。宿和を護るために強い力となってくれるはずだ。……金もないと困るからな、これも預ける。一族の全財産が入ってる。大事に使ってくれ」

大きな巾着袋を衛護は恐る恐る受け取り、黒のロングコートの懷にしまった。

「……ありがとうございます。お父さん、僕は宿和さんを全力で護り通します」

「うん、そうか。お前も立派に育つたな。今では俺を超える大物の魔術師になった。将来が有望な人間になつてくれて、父親である俺としては鼻が高い……」

初めて笑つた父を衛護は見た。いつも厳格だつた重は息子の衛護に対し一度たりとも笑顔を見せたことはない。厳しい教育を受けた衛護にとって重という者は、恐怖の対象だつた。

それが今、重は昔話でも聞かせるかのように優しい声音で衛護に話し掛ける。

重がどれほど息子に対し期待していたのか、たつた今見せた笑顔だけで衛護は知ることとなつた。

「宿和、絶対に奴から逃げるんだ。奴の狙いはお前一人だけ。その身に宿す膨大な魔力の塊 黄金釜（*all of the world*）を奪いに来た。いいか。きつい言い方になつてしまつが、お前は死んではならない。死ぬようなことがあつたら衛護を身代わりにしろ」

重の視線が衛護の後ろで小さく隠れていた宿和に向けられる。

宿和がびくっと震えたのが衛護の背中越しから伝わつた。果たして、その反応は寒さゆえからなのか。

全識一族の三代目の代から生きている、見た目十五歳の少女。普通なら宿和は四百歳を越えている。だが黄金釜（*all of the world*）の影響で、肉体的にも精神的にも十五歳のまま止まつっていた。

「宿和、これだけは聞いてくれ。お前の身体の中にあるモノはな、

全識一族の？願望？が詰まっている。俺のお父さんや、お爺さん。更にはもつと上の代の魔術師たちが自分の命と引き換えに魔力を注ぎ込んだ奇蹟を起こせる代物。大事なモノなんだ……

白い吐息を吐きながら、重は話を続きを続けた。

「我々全識一族の願望は？運命？から解放されることだ。人間の自由を束縛するヤツらから自由を取り返すのが、俺ら全識一族の望み。お前が命運を握っているんだ、宿和。だから、どうか一族の願望を叶えてくれ……！」

願望が果たされたときに重自身がいないのが悔しいようだった。話を聞いていた宿和は、衛護のコートをぎゅっと強く掴んだまま何も語らない。

重の言葉を理解したのかどうかは、彼女の表情を見る限りではわからなかつた。

「奴は人間ではない。人を超えた怪物だ。単独で全識家に奇襲し、一瞬のうちに一族全員を惨殺した。そんな奴を俺は放つて置けない。一族の仇と、お前らを逃がすために少しでも足止め出来るなら……」
重はざつと雪を踏みしめて、衛護たちに背中を向けた。

大きな背中からは絶対にここを護り通すと決めた重の信念が伝わってくる。

「ゆけっ！ 早く！」

重が叫んだ直後、猛火に包まれていた家が無残にも崩れ落ちた。長かつた魔術師の歴史も、突然顕れた人外の手によって幕を閉じる。

全識一族は魔術師の血統で、魔術の世界では有名な家系だった。でも彼らは世間の目から逃れるように田舎町へ移り住む。時代が時代で、科学万能な現代では魔術は異端者と看做されているからだ。時に魔道と呼ばれ、魔術師は人ならざる者というのが人々の共通認識となつた。

人外が襲撃したのは、山奥に家を建てて魔術の探究をひつそりと続けていた矢先の出来事。

「行きますよ、宿和さん」

「うん……」

じくりと頷いた宿和は、鍵形のネックレスを大事そうに握つていた。

衛護はネックレスを持つていた手と反対の手を掴み、走り出した。暖かい体温が彼女の小さな手から感じられる。

冷たい風に煽られながら、衛護と宿和の二人は山を下つていく。走つている最中、衛護は一度だけ振り返り父の姿を見た。

誰よりも厳しく、誰よりも特別だった存在。全部愛情表現の裏返しだったのかもしれない、と衛護はふとそう思った。根拠はない。でも不器用な重のことだから素直に愛情を注げなかつたのだろう。

衛護と宿和の二人だけになつてしまつた全識家の血統。

重の生死は屋敷から遠く離れたところまで来た衛護に知る術はない。襲撃者と対決し、殺ろされてしまつたかもしれない。

突如、沸き起こつた想いに衛護は自分自身でさえ驚いた。衛護の願望、それは一族の復興。崩壊した全識家を元に戻すこと。

厳しかつた全識家の教育や修練は決して良かつたと言えない。だが全識家が滅びしていくところを目の当たりにした衛護の胸はぽつかりと穴が空いていた。

あまり感情を面に出さない衛護でも、感情はある。悲しい、寂しい、辛い、それらが今の衛護の感情だつた。

走りながら、横を向く。懸命に衛護に着いてくる宿和。

彼女の願望とは一体なんなんだろう？

衛護は今すぐ訊きたくなつたが、息の上がつた宿和に尋ねるわけにもいかない。この逃亡生活が終わつてから訊こう。

終わりの見えない道程に、衛護と宿和は同時に一步踏み出した。

【第一章】

地獄の業火の夜からあつといつ間に半年が経つた。肌寒かつた冬から、じめっとした夏へと変貌を遂げる。

全識衛護と全識宿和は故郷から遠く離れた集星市しゅぎに行き着く。父であつた全識重の言い付けを守り、衛護は都会のマンションの一室を隠れ蓑として借りて、長期滞在することにした。

今、衛護は一人で昼飯を買いに外を出歩いている。

宿和はマンションで大人しくお留守番。いつ彼女を狙う者が顕れるかわからぬからだ。むやみやたらに彼女を連れて歩けない。とは言つてもさすがは都会。人の往来が激しい昼間に奇襲する輩はないだろう。

ビルが立ち並ぶ大通りを散策していると、人々の視線がやたらと向けられる。通り過ぎる人通り過ぎる人が変な目で衛護を見る。

気になつて衛護は自分の身体を確認する。納得した。衛護は冬服だつたのだ。夏の日差しが降り注ぐ中、衛護は真っ黒のジャンパーを着ていた。

変態の類でない限り、七月も半ばに差し掛かつたこの時期に冬服を着ている兵はいない。

「仕方ない、夏服を買いますか。体温調節を自由に行えるよう修練で身につきましたが、注目を集めるのはよくないです……。ついでに、宿和さんの服も調達しましょう。でないと、彼女と出歩けません」

そうと決まれば衛護は近場の服屋に立ち寄った。

店内は直射日光を遮ってくれて、エアコンのお陰か涼しい。

やはりここでも衛護は人の目が気になつた。でも、それも一瞬のこと。買い物客に紛れ込めば視線は薄くなる。

衛護は自分の服を適当に取つて買い物籠に入れていく。次に女子向けの衣服を覗きに行けばカツプルらしき一人の買い物客が言い

争っていた。

二人とも制服を着ていた。どうやら学生のようだ。学校帰りに立ち寄ったのだろう。

「俺はこれが似合おうと思つただけだ。着てみてくれよ」

「なんで、あんたなんかのために着なきやならないの？　いいの。自分で決めた服が一番なんだから」

「お願ひ！　一生のお願いだ！　これを着てみてくれ！」

そう言って肩まである金髪の男が一着の服を女の子に見せた。茶髪の女の子が「ええ」としかめつ面で抗議する。

「こんな肌の露出が多い服は、わたしには似合わないの！　だから着ないよつ！　そういうの着るのは好きな人の前だけ！」

茶髪の女の子にきつぱりと振られてしまつた金髪の男。がっくりと肩を落としていた姿は哀愁が漂う。

可哀相にと思いながら、でも衛護は関わり合いを持たぬよう気配を消して、宿和に似合いそうな服を求めていた。

「ねえ、何探してるの？」

「えつ……？」

声を掛けられ振り返れば、そこには先程の茶髪の女の子がいた。衛護を見上げながら、笑顔で訊いてくる。

「い、意外にカッコいいかも……」

「おいおい！　何してるんだよ、くくつはー！　見ず知らずの人にはきなり声を掛けるなんて」

「いいじやない。女の子の服で苦労しているみだから、わたしが手伝つてあげようと思つただけよ」

「余計なお節介だろ。彼女がいるだろ、ふつー。服のことばは彼女に任せておけばいいって」

買い物籠を手にぶら下げた金髪の男が慌てて衛護のところへやってくる。初めて相対した金髪の男は、頭の上にサングラスを置き、制服を着崩したどう見てもキャラ男。

「どうもすいません、と謝りながらキャラ男は、くくつと呼ばれた

女の子の腕を引っ張る。が、

「ねえ、ほんとに彼女と二人で来たの？ にしては彼女さんの姿が見えないけど？」

きょろきょろと周辺を見回すくぐり。肩口で揃えた髪の毛からシャンプーのいい香りが漂ってくる。

「いいえ、僕は一人できました。貴方が察した通り、どの服を選べばいいのかいまいちわからないんです」

「ほら、やつぱり！ 倉の嘘付き！」

満面の笑顔を作るくぐりに、衛護は一步後ずさる。

人との接触は控えたかったが、こればかりはどうしようもない。男物の服とは違い、女の子向けの衣服は山ほどあり、どれを買えばいいのか迷っていた。

「ちぇっ、まつたく。放つておけばいいのによお。困ってる人を見ると直ぐに世話を焼きたくなる性格をどうにかしろ！」

「人と人は手を取り合って助け合うもんだよ。倉も優しい男の子になろうねー？」

「そうじゅなくてさ、よく見ず知らずの人間においそれと抵抗感もなく話しかけられるな、と思ってだな。そんなんじゅいつか悪い男の人に連れ去れるぞ？」

「そん時は、わたしを連れ戻してその悪い男をやつつけてよ。そのための彼氏が出来るまでのボディーガード役でしょ？」

「う、うん……。そう言つたらそうなんだが……。俺の気持ちも察してくれよな……」

「なんか言つた？」

「なんでもない。いい加減、彼の話しを訊いてやれよ」

「ああっ！ そうだつた。ごめんね」

倉と呼ばれた男から、衛護に向き直り、ペコリと頭を下げるすべり。

「いいえ、大丈夫です。頭を上げてください」

宿和の畏まつた態度に、衛護は慌てて両手を振る。

「それより、仲のいいカップルですね」

「えつ？」

「おい……」

倉とくくりは、一人して微妙な反応を見せた。どうやら言つてはいけないことを言つてしまつたらしい。カップルではないのか。ではなんだろうかと衛護は思つたが、問い合わせることは止めにした。微妙な空気を感じ取つたからだ。

「で、誰に向けてのプレゼントなの？」

「プレゼントではないです。僕の服を買つついでに彼女のも買おつかなと思いまして。その、彼女は僕の……」

その先に続く言葉を濁す。宿和と自分の関係はなんなのか、衛護自身が一番わからなかつた。目の前の一人のように（彼らは認めていないが）カップルっぽくはない。だが十六年もの間顔を合わせていた衛護と宿和の関係は、他人と呼べるはずもなく、恋人と定義するには曖昧。

「仲間、ですかね」

「仲間ねー。学校の友達、とか？」

「違います。僕は学校へは行つていません」

「ええつ！ 行つてないの？」

しまつた、と衛護は思つた。このぐらいの年齢の子ならば学校へ通つているのが当たり前。けれど衛護が住んでいたのは山奥の田舎町。学校は周辺ではなく、家から一歩も出ることを禁じられていたため、一族の中で教師勤めをしていた魔術師に衛護は教えられていた。

勉強の飲み込みが早かつた衛護は大学までの勉強過程を終了し、でもまだ学び足りなかつたからあらゆる参考文献を開き貪欲なまでに知識を詰め込んでいった。

そして衛護はわずか十六歳にして、全識一族の誰よりも博識になつていた。教師担当していた魔術師は衛護の学ぶ姿勢に対しても畏怖さえ覚えたと、言つていたことを思い出す。

「ああ、ここいらに引っ越したばかりなんです。高校は元気にしていますか悩んでまして」

瞬時に言い訳を考え付き、貌には動搖の一切を見せなかつた。

「なーんだ、そういうこと。てっきり不良少年かと思つたよ
口から出任せを言つたのにくくりは納得してくれた。ぶんぶんと
頭を上下に振つて了承の意思表示をしている。

「ふん、んなことありえるかよ」

そう倉は言い捨て、サングラスをかけて衛護を見据える。サングラス越しからでも解る鋭い眼光。

「じゃあ、うちの学校きなよっ！　？私立集星学校？に！　いいと
ころだよー。倉みたいに馬鹿な奴が多いけど、でも校則は緩る緩る
で愉しいよ！　それに、恋愛おつけーだし！　わたしがきみとその
噂の女仲間さんの恋を成就させてあげるよ！」

「いや、だから、僕と彼女はそういう関係じゃ……」

「おい、もうよせよ、くくり。困り果てるだる。『めんな。俺の
幼馴染み……が、煩くて』

間に取り持つた倉だったが、何故か「幼馴染み」と呼ぶ時の声の
音量が小さい。

直ぐにそれがなんのかを察した衛護は、彼にも彼なりの葛藤が
あるのだろう、と思うことにした。だから、衛護が先程『仲のいい、
カッフルですね』と言つた時に、微妙な雰囲気が漂つたのだろう。

「あつ、元々の話しから大分それちやつたね。ごめんね。じゃあ、
女仲間に似合つた服を探してくる！」

「お願いします……」

くくりの性格に多少の不安に苛まれながらも、衛護は彼女に総て
を任せた。

衛護が選んだ服はきっと宿和の反感を買うことになる。もつとい
いのがあつたと思うけど、と詰問されるのが目に見えている。
それだったら女の子に頼んでもらつた方がいい。

衛護より同姓のくくりの方が女性服に関して詳しいからだ。

「完全に人との関わり合いを離れるのは無理か、……」

人の接觸を絶つつもりでいたのに、こうしてもう一人の人間と関係を持つてしまった。

これも何かの縁なのかもしれない。そう思つことにした。どうせここを出たら、もう一生逢うこともないだろつ。だったら今彼らのお言葉に存分に甘えさせてもらつべきだ。

「これと、これと……えいっ！ これも！」

次々と衛護の持つていた買い物籠にくくりが洋服を入れていく。いくら金がまだ沢山あるからといって、衝動買いするつもりは毛頭ほどない。

一着ぐらいで充分だ。集星市に長期滞在するからといって、またどこかへ移り住むことになる。そうなれば荷物は少ないに越したことはない。一定の場所に留まることは危険。何せ、今もなお衛護たちは追われている身なのだから。

「そういえばお金の方は大丈夫？ 結構籠に詰め込んだけど……」

「出来れば上下合わせて一着でよかつたんですが」

「えつ？ それだけでよかつたの？ なーんだ。最近のトレンドを取り入れた可愛い服全部持つてきちゃったよ。早く言ってよね、きみつー！」

「ごめんなさい……」

衛護の隣なりにいた倉が「はあー」と深い溜息を吐き、首を横に振る。

彼のいつもの苦労がヒシヒシと伝わってきた。

「今日はどうもありがとうございました」

衛護の手には手提げ袋。やつとの思いで買った服が入っている。くくりたちのお陰だつた。だから衛護は頭を下げて感謝の意を示した。

「いえいえ、お役に立ててよかつたよ」

頭を上げると、くくりは頬を赤く染めながら頭を搔いていた。

宿和の服を買うだけだったのに衛護は一時間近くも店内にいた。くくりが親切心で宿和の服を選んでいるのは知っていたが、いくらなんでも時間を掛けすぎた。店内の柱時計が十一時を示してから、やつと店を出る。

きつと宿和はお腹すかせたライオンのように唸っているだひう。家に帰れば彼女から山ほど愚痴を聞かされる。

「じゃあ、わたしたちはこれで！」

「またな」

くくりと倉は手を振り、衛護に別れを告げた。

「……また、どこかで」

衛護も彼らに挨拶をして背を向けた。もう一度と逢うことはないだろうと、心中で思いながら歩を進めた。

「そういえば、彼らの名前を訊いていませんでした」

いくら最後の別れだからといって、よくしてもらった彼らの名前を知らないのは失礼に当たる。

振り返る。くくりと倉の姿はない。衛護は彼らがいると思つてしまつた。どうしていると期待してしまつたのだろうか。

ああ、なんだ。その感情を識るのは至極簡単なことだった。自分ることは自分が一番理解している。決して面に感情が顯れない衛護でも、それがなんなかつていた。

「……僕は寂しかつたんですね。彼らがいなくなつてしまつことが」衛護にとって学校とは同年代の生徒たちが集まり、友達を作り、その友達と一緒に談笑して青春の汗を共に流し、たまに夜遊びして過ごす夢のような場所。

それが衛護の認識。總て参考文献を開いて聞き齧った知識。一度も学校へ行つたことがないため、一体どういうところなのか想像で補うしかなかつた。

同年代に見えるのが唯一宿和だけだった。でも友達と言える関係ではない。しつくりきた言葉は主人と奴隸。宿和のために命を捧げ

る覚悟をした衛護にとつて、彼女は絶対に護るべき主。

「宿和さんを待たせてはいけない。急がなければ。腹が空きすぎて倒れてるかもしない」

思考に耽つていた頭を振り、止まつていた足をまた動かす。

帰路に着く手前、デパートに寄り適当に食料を買い込む。まるで主婦のように大量の手提げ袋を両手に持ち歩く。

マンションの五階へ来た衛護はドアの前に立つ。

「呪文（spell） 限定解除（limit cancel）」

魔術を発動するために衛護は？魔力貯蓄庫まじょちよちくこ？と呼ばれる、マナを溜め込むための器官に働きかける。

魔力貯蓄子は人間ならば誰しもある器官。

それはバケツのようなもので、そこに一定以キヤバシティ水を上入れると溢れてしまうように、魔力貯蓄庫にも入りきるマナの上限キヤバシティがある。

魔力貯蓄庫の大きさは、魔術師の歴史が長いか浅いかで変わる。歴史の長い家系で産まれた衛護の器官は普通の人間より三倍近くもある。父である全識重から血を濃く受け継いだ衛護は、魔術師になるべくしてなつたと言えよう。

魔力貯蓄庫にあるマナの一部を人間界の条理に変換し、魔力を体内で生成する。魔術は、作り上げた魔力を体外に出すことで発動する。

それらの過程を僅か一秒で衛護はやつてのける。

すると、ガチャリと音を立てて玄関の鍵が開く。

衛護が詠唱した呪文ではないと決して開けられないよう、魔術結界をドアに敷いていた。

「……っ」

直後、注射を刺されたようなちくつとした痛みが手に走り、爪の部分に新たな？蒼い痣（stigma）？が浮かび上がる。

打撲したときのように身体が青く変色した現象を 蒼い痣（stigma）と、魔術師の間ではそう呼ばれている。と同時に、その痣は魔術師である絶対的な証。魔術を行使すると必ず出来るから

だ。

蒼い痣（stigma）の別名、死の刻印？は魔術師にとつて
誇りでもあり、恐怖もある。魔術を一度でも使つたモノは、不可
避の？死の運命？に巻き込まれるからだ。

死の運命は、魔術を使用するための必須条件であり、代償行為のこと。人が死ぬのは、寿命、がん、事故など様々だが、死ぬべき時間の速度を速めることにより、魔術を発動する。

一年後死ぬのがその人の決められた運命だったとする。しかし、魔術を使ふると、半年後に死ぬことになる。死ぬ速度がどこまで速まるかは、使用した魔術の程度で決まる。

魔術の力が大きければ大きいほど、死ぬ時間はどんどん速まっていく。

魔術は誰にでも簡単に扱え、自分の思い描いた想像物を具現化出来るという一種の奇跡を起こすもの。でも代償として自分の『死と死^{さだめ}』を捧げる。だから魔術を初めて扱う人間は慎重になる。

結果、自分の命を犠牲にする恐怖が人々を魔術の世界から遠ざけ、科学の力に頼る原因となつてゐる。

魔術を使えば使うほど代償が大きいことを衛護は百も承知している。それでも魔術師の家系で育ち、宿和を護れと重からの、一族全てからの命令があつたから使わざるを得なかつた。

「これで、合計四つ目の蒼い痣（s t i m a）か……」

まだ全部爪にしか顯れていない。でもこれから魔術を発動すればするほど蒼い痣（stigma）は衛護の身体を蝕んでいくだろう。魔術の発動は極力控えたかつたが、宿和の安全を考慮すればそんな悠長なこと言つていられない。

「ただいま戻りました」

扉を開けて中に入ると、玄関口には一組の小さな靴があつた。衛

護の他にもう一人ここに住んでいる同居人の物だ。

「おひな様はおひな様の心をもつておひな様のことを思ふ」

ツインテールの少女は長い髪を揺らしながらパタパタと衛護に近づいてくる。鼻が高く、フランス人形のように整った顔が迫り、金色の大きな瞳で衛護を睨み付ける。

「一体どこをほつつき歩いてたわけ！？」

「ちょっと買い物が梃子摺りまして遅くなってしましました。申し訳ございません」

「なんで昼飯買うだけでこんなに時間が掛かるの！ 腹が減つて死んじやうところだつたじゃん！」

頬を一杯膨らませて、宿和は声を荒げる。

「……すいません」

「それより、荷物多くない？」

宿和が興味深げに衛護の手元へと視線を向ける。人差し指をこめかみに当てて首を傾げると、透き通るほど美しい銀の髪が揺れた。

「はい、これ宿和さんのです」

持っていた袋のうちの一つを、衛護は彼女に渡す。

「えっ、私の？ いらないよ、食材は。そんな物もらつても嬉しくない！」

「違いますよ。服、です」

そう衛護が言った直後、宿和は黄金色の瞳を輝かせて、袋を引っ手繩つた。

袋を開けて、中の物を取り出す。花柄模様のワンピースが出てきた。

「これ、今着ていい？」

「どうぞ。但し、「」飯を食べるとときは注意してください。汚れてしまいますので」

「うん！ ありがと、衛護！」

花がパツと咲いたように宿和は満面の笑みを見せ、玄関の直ぐ真横の部屋に入る。

「ふう。気に入ってくれてよかったです。これもくくりさんのお陰……ですか」

衛護は安堵の溜息を漏らす。靴を脱ぎ捨てて家に上がる。

マンションなのに、二人で暮らには申し分ないほどここは広い。全識家の屋敷よりかは狭いが、でも使い勝手が悪いわけではなく、この物件を初見で住もうと即決した。

広さが決定的な要因ではない。全識重の命令で、人の目が多い場所に建ついい立地条件がたまたまここだったのだ。しかも都会なのに何故か月々の家賃や、初期費用までもが安かつた。

集星市の中に位置するマンションが空いていたのは幸運といえよ。

玄関の前の廊下を渡り、居間に続くドアを開ける。

「何にもないです……」

まだ引っ越してきたばかりなので、居間にはテーブル以外の物はない。板張りの床へ外から差し込む日差しが室内を照らす。カーテンを取り付けていないため、外から丸見え。ただ、周辺に高層マンションがないので部屋を見られる心配はない。

「さて、と。飯を作りますか」

居間の一角に向かう。申し訳程度に取り付けてあった小型の台所。コートを脱ぎ捨てて、シャツを捲くる。懐から二丁の拳銃と刀を取り出しコートの上に置く。

ややあって、衛護は自分の右手を見る。そこにほくつきりと浮かび上がる蒼い痣（stigma）。新たに出来た痣のことを宿和は知らない。

その痣を見ればきっと彼女は怒る。また、魔術を使つたの？ と問い合わせられると思い、衛護は今日買つた黒の皮手袋をはめた。

「でも、父の言つつけは守らなければなりません。たとえ自分の命が犠牲になつたとしても」

それだけは、衛護の譲れない信念だった。せめて、宿和がいる前では、彼女を不安にさせないようにしよう。

思考を打ち切り、手元の料理に集中する。

すると、パタパタと廊下を走る音が聞こえ、ドアが勢い良く放た

れる。

「衛護、飯まだー？」

宿和が可愛い声を弾ませながら尋ねてくる。
飯を作り終えていないことに、彼女が咎めに来たのかと思つたが違つた。

「ごめんなさい、まだです。後少しさうので待つていてくださいませんか？」

「うん。その代わり料理が出来上がつたら、私のファッショントを見てよね！」

「わかりました」

どうやら衛護が（くくりが選んだ）買つてきた服を相当気に入つてくれたようだ。

背後から彼女の鼻歌すら聞こえてくる。

それだけで心が和んだ。彼女が喜んでくれるから、衛護は幸せを感じる。

「はい、出来ましたよ」

今日買つた紙皿を一枚スーパーの袋から取り出し、そこへ料理を盛り付けていく。

今日は、ミートソーススパゲティー。夏真っ盛りの時期に、昼間から重たい物を食べたら胃もたれする。だから喉を通し易い麺類にした。

「早く早く！　ひっさしに料理持つてきてよー。」

「わかりました、わかりました」

宿和に急かされ、衛護は慌てて皿を持つていく。

「……」

途端、唾をくじくと飲み込み、衛護は立ち止まつた。

「どう？　可愛い？」

「……はい」

「もつと感想いつてよ。どこがどういことか言わないと全然伝わってこない」

「…………」

文句を並べながらも宿和はぐるりと一回転して、衛護に全体を見せる。

花柄模様の半袖のワンピースがひらりと宙を舞う。肩から出た腕は、長くてしなやか。黒のハイニー・ソックスを穿いた足を交差させて、ワンピースの裾を持ち上げる。

「衛護はワンピースだけじゃなく、ソックス、靴、そして下着も買ってあげた。もちろん、下着はくぐりに任せたが。

……美しい。それだけしか思いつかなかつた。綺麗なものを見ると何も考えられくなるというのは、こういうことなのか。

感情の起伏があまりない衛護だからこそ、宿和は多くの言葉を言つてもらいたいのだろう。

「似合つてますよ、とつても。よかつた、喜んでくださつて。その笑顔を見れただけで満足です」

「えつ、あつ……うん。買つてきてくれてありがとう、衛護」

正直な感想を述べると、宿和は気恥ずかしくなつたのか俯く。赤く火照つた顔を隠そうとしていていた。

宿和は衛護と違つて感情豊かだ。笑つたり、怒つたり、泣いたりと表情をころころ変える。けれど、人前では決して本当の自分を曝け出さない。無口で通す。集星市に来る前に、彼女と共に旅をしてきたから衛護は知つていた。

宿和がそうなつてしまつたのは、全識家の調教せい。彼女は道具と同等の扱いを受けてきた。絶対に人を信用してはならない、と教え込むためのものである。

でも衛護は彼女とこうして気兼ねなく話している。宿和と同年代で話し易かつたというのもあるが、彼女の弱音をいつも衛護が聞いていた。衛護も厳しい教育を受けていたから、宿和の気持ちを誰よりも理解している。だから、衛護の前だと無邪氣な姿を晒す。

宿和の性格に一番の影響を与えたのは、屋敷が滅びた夜の日だろう。今まで人の欲望に触れたことはなかつたはずだ。だが燃えゆく家を見たときに、人間とは黄金釜（a 11 of the world）

「d）を奪つためならば同じ人間を殺してしまつ殘忍な生き物だと知つた。

「早く食べよ。料理が冷めちやうから」

「あ、うん。そうですね」

思考に耽つていた頭を軽く振り、衛護は料理をテーブルの上に並べて床に座る。

スペゲティーからいゝ匂いが漂い、食欲をそそる。

「いただきまーす」

同時に宿和と衛護は挨拶をし、手を合わせてテーブルに置かれた料理を食べ始める。

両手を前に突き出してしまつたのがまずかったのか、

「ねえ、何で手袋してるの？」

と、至つて普通の抑揚で宿和は衛護に聞いてくる。

「宿和さんと同じく、気に入つたから手袋を穿いているんですよ

「ふーん。そう……」

咄嗟の嘘に宿和は特に気にした様子もなく、次々と料理を口に運んでいく。

腹が減つたときの宿和で良かつたと、衛護は内心ほっとする。宿和は食べるのに夢中で、衛護の些細な変化を見抜けていなかつた。

「そういえば、宿和さん。誰か尋ねてきましたか？」

「ううん、来てないよ

「ならよかったです」

念のために衛護は、マンションから数メートル離れた場所に使い魔を放つていた。衛護の使い魔はツバメで、そのツバメにマンションを監視させるよう指示を送つていた。

異常が起きたときは、鳥の視覚を共有し、衛護に伝えてくれる仕組みだ。

マンション自体を強力な魔術結界で封鎖したかったのだが、そうすると他の魔術師たちに感づかれてしまつ。

魔術師は魔術に敏感で、素人たちが発動する下位魔術程度の魔術

なら日常茶飯事だから見逃してくれる。だがマンション丸ごと結界の中に閉じ込めるという中位魔術になつてくるとそつはいかない。

衛護は彼らに気付かれないよう玄関だけに魔術結界を敷いていたのだ。

「宿和さん、僕と一緒に学校へ通いませんか？」

「……えっ？ 急に何を言つてるの？」

フォークを持っていた手がピタリと止まり、宿和はゆっくりと面を上げる。黄金色の目を大きく見開いて衛護を凝視していた。

「学校へ入学しましょう、と提案してるんです」

「嫌つ！ ……人が沢山いるところに行きたくない」

「反対されると解つてました」

「なら！ なら、どうして！」

「今日はたまたま襲われずに済みましたが、いつもとは限りません。僕が外に出ている間に宿和さんが危険な目に遭つっていても、直ぐに助けることが出来ないんです」

「じゃあ、衛護と一緒にいるから！」

「余計に目立ちます。僕たちぐらいの年代の子は、学校へ通うのが当たり前です。制服を着た学生にまぎれるのが一番なんです。なのに浮浪者みたいに街中をうろちょろしてたら不審に思われます。ただでさえ貴方は容姿がいいですから、人々の注目を集めてしまします」

聞き分けのない子供をあやす母親のように、衛護は宿和に優しく諭す。

衛護とて宿和の気持ちが解らないわけがない。衛護以外の人間を信用しておらず、通りがすりの人でさえ警戒心を強く懷いている。

学校ともなれば、人との関わり合いはもつと深くなる。宿和は人との関係を絶ちたいのに、衛護がそれを許さない。だから宿和は猛反発しているのだ。

そんな彼女を説得するのは一苦労する。でも衛護のことを思えば宿和は納得してくれるだろうと、甘い考えを持つていた。

「嫌嫌嫌嫌！ 私は狙われてるんだよ！ なのに、どうして！」

怒りを爆発する宿和。立ち上がり衛護を睨みつける。その瞳は金色ではなく、燃え盛る炎のよつに真っ赤。目の端から零れ落ちた涙は、頬を伝つて床に落ちる。

そう、泣いていたのだ。

「私の中の、黄金釜（a l l o f t h e w o r l d）を欲しがり同じ人間を殺す。そんな人間が、怖いの。人間の欲望が。人間の目が。人という存在が怖くて怖くて仕方がないの！ 解つてよ、衛護……！」

「解つてます、貴方のことは誰よりも理解してます。だけど、僕は宿和さんを護らなければならない。この命に代えてでも。だから、宿和さんを死なせるわけにはいかないんです」

「そういう、衛護の態度嫌い！ だいつつつつ嫌い！ 自分の命を粗末にして、私を助けないで！ 偽善の優しさなんていらない！」

胸に秘めていた想いをありつたけぶつけて、宿和は居間から出ようとする。

すかさず、衛護は彼女の手を掴む。

「何、よつ！ 離して！」

「聞いてください。確かに僕が言つことは偽善に聞こえるかもしません。でも、貴方が心配だから、宿和さんが笑顔で笑ってくれるなら、それだけでいいんです」

宿和は握っていた手を強引に振り解き、衛護と向き合つ。瞳から流れる涙を衛護は人差し指の腹で拭つてあげた。

「わ、私は、衛護が死んでしまうと思うと、苦しくて、寂しくて、辛いの……。衛護がどこか遠くへ行つてしまつたら嫌なの！」

「僕も同じですよ、宿和さん。宿和さんが僕のことを想つているのと同じで、僕も宿和さんのことをいつも考えています。互いに相手のことを想いやつているから、大事にしたいと思うのです」

そう言って、衛護は宿和の身体を引き寄せ、抱きしめる。

彼女は拒むこともなく受け入れて、衛護の腰に腕を回す。小さな

身体が不安のあまりか、震えていた。

「大丈夫です。僕は宿和さんから離れません。貴方を襲う恐怖から、僕が護つてあげます。そのために僕がいるんですから」

「……そ、それは、一族の命令……だから?」

「違いますよ、僕の本心です」

衛護には宿和を護れという一族からの命令がある。それだけは優先すべき重要な事柄なのだ。たとえ宿和に嘘を付いてでも。

「……うん、わかった。学校に行く……」

長い抱擁が終え、衛護は宿和をそっと放して、彼女の肩に両手を置いた。小さな身体はまだ小刻みに揺れている。

瞳から流れる最後の一滴を、すかさず衛護は拭き取つてあげた。「学校へ行つても、クラスは同じにしますから、安心してください」

「……うん、わかった。つて、あれ?」

「どうかしましたか?」

「コレ! そうコレ何! 思い出した!」

ばしつと宿和の頬に触れていた手を掴み上げられる。握り締められる手は力強く、振り解けないほど。

もしかして、と内心の動搖を悟られぬよう衛護は至つて冷静。「腹が減つて、そこまで気にしてなかつたけど、そう! どう見

ても怪しいんだよね、この手袋……。外しなさい!」

「えつ……? いや、ファッショソンドので……。それは聞き入れられないお願ひです」

「私に逆らうつていうの? このつ! くぬぬぬ!」

すっぽんのように一度食らいついた衛護の手を彼女の手は絶対放さなかつた。宿和の執念は並大抵のものではない。

衛護が腕を上げると、一の腕にぶら下がつて必死の抵抗をしてみせる。

どんなことをしても宿和は衛護の手袋を引き剥がそうとする。

その執着心に負け、最初に折れたのは衛護の方だった。

「わかりました。外します。外しますから、手を噛むのを止めてく

ださい」

「ふん、それでいいの。さつさと手を見せて」
衛護の手から口を放すと、宿和はそう言つ。手袋にはくつきりと
彼女の歯形が出来ていた。

逃げないようにするためか、衛護の腰に腕を回して抱きつく宿和。
ゆつくりと手袋を脱がす。宿和だけには知られたくなかったが、
それももう無理な話だ。

まずは、蒼い痣（stigma）のない左手が露になつた。
「どうですか？」

「もう片方も」

と、低い声で言われたら渋々右手も見せるしかなかつた。

衛護は覚悟を決めて手袋を剥いだ。新たに出来た痣を見た途端、
衛護の腰に巻きつけていた腕に更に力を込める。

「……やっぱり。また魔術を発動したの？ まだ爪にしか蒼い痣（
stigma）は顯れていないけど、これ以上魔術を使い続けたら、
どんどん死に近づく。私を置いてかないでって言つたでしょ！ も
う魔術は使わないで！」

「出来るだけ努力はします」

「そうか。だからそう言つてたのね。わかつた。絶対に学校へ行く
「急にどうしたんですか？」

腰から離れて、宿和は衛護の目前に立つた。衛護の手を、彼女の
温かい手が包み頬にすり寄せる。

「私が我ままだから、衛護に魔術を使わせてしまうんだね。今日
だつて外に行きたくないって言つたから、私の安全を考えて魔術の
使用をせざるを得なかつた。違つ？」

「……」

宿和は魔術の使いすぎで腹を立てているのではない。衛護が宿和
のために魔術を使わせているのだと罪の意識があるから、罪悪感が
あるから止めて欲しいと訴えているのだ。

だから宿和は、自分の命と引き換えに護る衛護の態度を酷く嫌つ

ている。

「私、衛護のこと全然考えてなかつた。それなのに、自分の意見ばつか言つてた。ごめん」

「宿和さんが気にする必要はありませんよ。僕自身が使いたいと思つて魔術を使つたまでですから」

「いいえ、私にも責任がある。うん、ちょっと怖いけど衛護が傍にいてくれるのなら、何倍の力にもなる。決めた、明日から学校へ入学する」

「積極的になつてくれたのはありがたいことですが、すぐに、とはいきません」

「そう、なの……」

がつくりと肩を落として頃垂れている宿和に、衛護は頭を撫でてあげた。

「明日、学校へ一人で行きましょう。もしかしたら、明日から通えるかもしれません」

「うん！ 一緒に行こう！」

満面の笑みを浮かべて頷く宿和。それを見た衛護も安心する。まだ湯気を立てて残っているスペグティーを衛護と宿和は片付けた。

た。

「……と、ということなんです。僕たちは一人だけで暮らしてきました。せめて学校には通わせたくて」

「……ぐずつ。そうだっじやつたのか。今まで苦労していただろうに……。いい、許可しようかのお！」

思い立つたら直ぐ行動。

衛護と宿和の二人は翌日の早朝から私立集星学校へ来ていた。集星学校の生徒たちが興味深げに見てきても気にすることなく、衛護は正々堂々とした立ち振る舞い。

宿和はおつかなびっくりといった様子で衛護に引っ付いていた。

昨日高々と学校へ行くと宣言したけれど、やはり人が怖いのだろう。校内に入り、近くにいた事務員にここに来た旨を伝えると、校長室に通された。中央のソファに座り、校長と対面。

そしてたつた今校長から学校の入学許可をもらつ。

総て衛護がでっち上げた偽の話だつたが、どうして一学期という中途半端な時期に私立集星学校へ入学したいと申し出たのかわかつてもらえたようだ。無表情で語る衛護が、鈴内校長には迫真的演技に見えたのだろう。

衛護の話を、校長先生は涙を流しながら聞いてくる。名を鈴内といい、年は六十を越え、十代目の校長。自己紹介のときにそう言つていた。

「制服は、明日用意するから平気じや。どうする？　見学のために

今日授業を受けてみるかのう？」

「じゃあ、言葉に甘えていいですかね？」

「うん、うん。そうするがいい」

校長はハンカチで涙を拭き取り、皺くぢやの顔が笑顔に変わる。念のために衛護は、隣に座つていた彼女に視線を向ける。先程から一言もしゃべらない宿和が心配で見てみると、ぶるぶると身体が異常に震えていた。

宿和の手にそつと触ると彼女は驚いたように震えたが、でも衛護の手を握り返す。

次第に震えが収まっていく。

「宿和さん、いいですか？」

「……」

無言で首肯するのが、彼女の精一杯の反応だつたようだ。了承を得てほつと安心する。

宿和が積極的になつてくれたのが何より衛護にとつて喜ばしいことだつた。ただ嬉しい気持ちは、決して貌には出ることはないけれど。「彼女は、学校が嫌いなのかの？　慣れればいいところじやぞ？」

もし何かあれば、ワシに相談するがええ。……楽しい学校生活を送れるよう祈つのとる。」

「ありがとうございます、校長先生」

立ち上がり、衛護は鈴内校長に頭を下げた。宿和も慌てて立ち、礼をする。

「では、失礼致しました」

校長室から出て行こうとする直前。

「辛いことがあったかもしれないけど、それは誰にでもあることじや。直ぐに打ち明けられないかもしれないが、打ち明けられるほど仲の良い友達を作るというのも学校という場所じゃぞ?」「

そう、小さな声で校長は呟いた。気付いているかはどうかわからぬいが、衛護には一言一句聞こえていた。

果たして彼は衛護たちの悲運を知っていたのか。校長が、でも家族のことを深く突っ込まなかつたのは、彼が配慮してくれたからだろひ。

衛護はもう一度深く一礼して、校長室から退場した。

「君たちか、新しい生徒は。話は総て聞いていたから大丈夫だ」

廊下に出たから直ぐに声を掛けられる。壁に腰掛けていた一人の女性が、衛護たちの前にやつて来た。

窓から差し込む日差しがその人物の貌に当たる。

身長は以外にも高く、百七十センチある衛護と同じ目線。底の高い靴を履いているわけではない。齡は二十代後半だろうか、大人の女性が特有の色氣がある。

びしつと着たビジネススーツ姿で、黒のストッキングを穿いている。長い黒髪をポーテールにして、切れ長の瞳が眼鏡の奥から衛護と宿和を見つめる。

悪いことは何一つしていないはずなのに隠し事がバレてしまったような、罪悪感に苛まれる。そのぐらい強い眼光だった。

「はい、そうです」

「私についてこい。君たちを生徒たちに紹介する

「あの、すいませんが貴方は？」

「私？ 私は君たちの担任の北村巳江だ、よろしく」

先を行く北村が急に立ち止まり、振り返る。すっと、衛護にしな

やかな腕を伸ばした。

どうやら、握手を求めているようだ。

拒むのは失礼だと思い、衛護は応じた。次に北村は宿和の前へ立ち、衛護と同じように握手を求めた。が、

「…………！」

衛護の後ろに彼女は隠れて、北村の握手を拒否する。

伸ばした手を引っ込めて、北村は何事もなかつたように歩き始めた。

「ごめんなさい。宿和さんは、対人恐怖症なんです。気に悪くしたのなら謝ります」

「いや、気にしてない。そういう生徒を見てきたことがあるからな。とつぐに経験済みだ」

「そうですか。すいません……」

北村の背中に向かって小さく頭を下げる。

つんつんと横から脇腹を小突かれる。無表情を装っていたが、小さな機微で宿和が何を求めているのか察した。どうやら手を握つて欲しいらしい。その期待に応え、衛護から彼女の手を奪つた。

宿和にとって安心できる材料というのが、衛護から伝わってくる温もりなのだろう。

「……こほん。兄妹でイチャイチャするのは構わんが、教室に入ったら手を離した方がいいと思うな

北村は途中で立ち止まって振り返る。ポーテールが大きく揺れ、眼鏡の奥から覗く瞳がぎろりと繋がれている手に向けられる。やっぱり握手を断つたのを根に持つているのだろうか。

「あらかじめ言つておいてやるが、全識宿和が握手を拒否したことには腹を立てているわけではない。君たちの関係が変に誤解されないよう注意したまでだ。入学初日からブラコン、シスコンだと思われ

たくないだろ？」

でも、怒っていることに変わりなかつた。

「はい、思われたくはありません。でも、僕たちは兄妹ではないので平氣です」

「ほほう。なら、君たちの関係はなんだといつのだ？」

女性にしては長身の身体が衛護の前に迫る。その威圧感はまるで、登山をしていくときに運悪く熊に遭遇してしまつたかのような危機感を与える。

「婚約者なんです。イチャイチャするのは駄目ですか？」

なんの悪氣もなく、衛護は咄嗟の嘘を平然と言つてのける。本当のことは言えない。衛護は宿和の身体に宿している黄金釜を護るために護衛役などとは。

何故か貌をどんどん赤くしていく宿和。

今まで無表情を通していただけに、反応を示したことに北村は目を丸くしていた。こいつも人間の反応をするんだな、と言いながら見る。

それが功を奏したのか、恋人同士だと北村は勘違ひしてくれたようだ。

ふんと呆れたように北村は鼻を鳴らして、

「リア充を見せ付けるバカはいらいらするな、まったく。もつてあと数年、いや、数ヶ月経つたら別れるのがオチだつて言うのに。まあバカに付ける薬はないって言つしな。若氣の至りだつていうのは解るが、もうちょっと人の目を気にしろよな。たくツ……」

ぶつぶつと文句を言い始める北村。恋愛絡みで昔何かあつたのだろうか。

慰めの言葉を掛けてあげようかと衛護は思つたのだが、突然壁を蹴り始めた北村に呆気に取られていた。

どうやらリア充を相当嫌つているようだ。

そんな彼女にリア充（だと思われている）である衛護が言える言葉などなく、かえつて火に油を注ぐことになる。

「……あー、ここが君たちの教室だ」

ズレた眼鏡を北村は元の位置に戻し、扉の上の一年A組みと横に書かれた札を指差す。

「私がまず最初に中へ入る。その後君たちに入つて来いと命じるから、そしたら登場しろ。いいか？」

「わかりました」

「……」

無言のまま首を縦に小さく振る宿和。

それを了承の合図だと受け取った北村は、扉を開けて中に入つていぐ。

扉の向こうから生徒たちのざわつきが肌を通して伝わってくる。新入生に過度な期待をするのは、定番中の定番だと学校の資料に書いてあつたことを衛護は思い出した。

「大丈夫ですか？」

「心配しないで、平氣だから」

北村が傍からいなくなり、宿和は本来の自分を曝け出した。無口、無表情を装つっていても本当は怖いのだ。

口ではいくら強がつっていても身体は小刻みに震えていた。

大勢の人々が扉の向こうにいる。狭い場所に人が密集する教室は、彼女にとつて恐怖以外の何者でもない。

「というわけだ、『入つて來い』」

合図が聞こえ、衛護と宿和は共に入つていぐ。宿和はまた無感情に戻る。繋いでいた手は扉を開けるまで決して離さなかつた。衛護たちが教室に入つた瞬間、騒がしさがピークに達する。

「あー、こいつらが

「ねえねえ、あの男の人かっこよくない？」「うんうん。かなりタ
イプ！」

「うわっ！ やべっ！ なんだ、あの美少女」「というか、あの二
人一体どういう関係なんだ？」

生徒の話し声が北村の言葉を打ち消す。生徒たちは衛護と宿和の

話題で持ちきり。特に宿和は女子からも男子からも注目を集めている。

「あー、煩い黙れ。人が話してるとときは静かにしろ」

どん、と教卓を思いっきり叩き、北村は教室全体を睨めつける。蛇にあつてしまつた運の悪い蛙のように、生徒の言動が固まつた。これが蛇睨みというやつか。

「こいつらが新入生だ」

「よろしくお願ひします」

「……」

生徒たちが興味津々な目で見てくる。いよいよ耐え切れなくなつた宿和は衛護の後ろに隠れて人の目から逃れる。それが逆に恥ずかしがり屋な性格だと思われ、生徒たちに好印象を与えた。

「んじや、自己紹介してくれ」

「僕は全識衛護といいます。どうぞ、よろしくお願ひします」

「……」

「対人恐怖症で、人前に立つと緊張して上手くしゃべれないで僕から自己紹介したいと思います。彼女は僕の妹で全識宿和といいます」

そう衛護が言うと、クラスの男子が「うおおおおおおお！ 恋人じゃなかつたのか！ チャンスあるんじやね！」と歓喜の声を上げる。

女子は女子で「目の色を変えて、ホント男子つて馬鹿ばっか」と、避難の声も上がつたが「あの女の子リストみたいに可愛いー！」と、絶賛する人もいた。

「ちつ、都合の悪いときは兄妹設定か。最近のガキは大人を完全に舐めてやがる。あー、うぜーうぜー」

怨嗟の「ごとき低い声で呴く北村。しまいには、教卓や壁を壊す勢いで蹴りまくる。その挙動を見た生徒らは、一瞬にして静けさを取り戻した。

「……あつ！ あの！」

「なんだ、雑未羅？」

「彼とはちょっとした知り合いなんです」

身体を動かしたからか眼鏡の位置がズレており、露になつた瞳が

忌ま忌ましげに雑未羅という人物へ向けられる。

衛護も北村と同じように見れば、茶髪の女子が一番後ろの席で立つていた。

「あつ……」

思わず声に出てしまつた。貌は依然として無表情だが、反応をしてしまつたのが運のつき。

掛け直した眼鏡越しから、北村が問いただげな眼差しで見つめてくる。

「ほほう。雑未羅にも手を出したか、隣にはい・も・う・とといふものがいながら……なあ、全識衛護？」

「いいえ、違いますよ。くくりさんとはそういう仲じや……」

「くくり、だと？ いきなり下の名前で呼び合つなんて、よく簡単に打ち解けられたもんだな？」

「くくり、と倉君が呼んでいたんで知つてているだけですよ。本名は知りません」

北村に詰め寄られても衛護は微動だにせず。

恋愛事に關して躍起になる彼女は、大きな失恋を昔したのだろう。でなければここまで衛護たちの人間関係に必死になるわけがない。

「倉？ ああ、久々（ぐ）津倉のことか。そうなのか、久々津？」

次の獲物を倉に移して、切れ長な目が倉を射抜く。

最初は無視を決め込んでいた倉だったが、北村の視線に含む殺氣にあてられたら、黙つていられるはずもない。

「……くつ、そうです。あいつの言つてることは合つてますよ。たく、なんで俺に振るかな」

座つっていても目立つ金髪頭に、ファッションのか頭上にサングラスを置いているキャラ男。倉は嫌悪を貌に貼り付せて、北村の質問に答える。

「それと… 言つておくが全識衛護、くくりを下の名前で呼んでいいとは許可してねーからな！」

「なつ！ なんで倉が勝手に決めてんのよ…」

怒りを声の節々に滲ませながら、くくりは倉に向かつて指をす。指摘を受けて倉は撫然としていた。どうして俺が怒られなきやならないんだよ？ と言いたげな貌で、衛護たちを睨む。

「あー、うぜーうぜー。青春真っ只中かよ、くそがッ！ 見せ付けるなよ、こつちは田に毒なんだから、たくシ！」

殺意を宿した瞳で衛護を見る。

注意されるのが衛護だけだったのは納得がいかない。でも反論すれば、蹴りを一発お見舞いされてもおかしくはない威圧感を放っていたので、仕方なく口を噤んだ。

「んじや、全識兄妹、お前らの席は……丁度いい。一番後ろの席に座っている薙未羅と久々津の近くにしよう。面白そだだから衛護は薙未羅の右横、宿和は久々津と薙未羅の間だな。……異論は無論ありますまい？」

片側の口元を吊り上げた底意地の悪い笑顔で、北村は圧力を掛けている。

……あの、面白そだからといつ本音が出てましたけど。と、言えるはずもない。

ここに抵抗すれば後で教員室へ連行され、調教されることだろう。「血口紹介も終わつたことだし、仲良くしてやつてくれ。んじや、授業を始めたいと思つ

北村が強引に締め括りした直後、チャイムの音が鳴る。

慌しかつた一日にやつと区切りが付いたのだった。

授業は一通り学び終えていたので比較的楽であり、復習の機会だと思えば苦にはならなかつた。

ところが衛護と違ひ宿和は勉強が苦手で、全部教わつたはずなのに他の生徒と同様黒板と睨めっこしていた。

休み時間になれば、授業とは違つた大変さ。授業が終わつた途端に、人だかりが主に衛護と宿和の周りに出来き、質問攻めにあつ。宿和が恐怖に怯えていた。急いで彼女の元へ向かい、彼らに事情を話すと、「ああーなるほど、だからか」と納得するや否や、今度は衛護の許に生徒の群れが集う。

あらゆる質問に嘘と真実を織り混ぜて頭をフル回転で使つていたからだろつ、修練で鍛えたはずの肉体も、精神も参つっていた。

それが一度ならず休み時間が来るたびに対応に追われていたのだから、放課後を迎える頃には草臥れていた。

「だいじょうぶー？ 全識君」

「んん……大丈夫です」

声を掛けられ、衛護は机にへばりついていた貌を上げる。

そこには宿和ではなく、くくりの姿。茶髪が夕日の色に染め上がりつていた。

「あれ、みなさんは？ それに宿和さんはどこにいったか知つてますか？」

「全識さんなら後ろ。もう放課後だからみんな解散してゐるよ。色々とお疲れ様」

顎でくくりは衛護の背後を指し、振り返つてみると宿和の姿を発見する。無言で佇む彼女は、まるで本当の仏蘭西人形のようだつた。ほうつと安堵の溜息をつき、再びくくりに視線を戻す。

「すいません、僕たちは帰ります。宿和さんを見ていてくれてありがとうございます」

「あ、いや、あのー、これからどうし?..」

立ち上がり帰ろうとする衛護に慌てた様子で話を続けよつとするくくり。

「どうつて……何がですか？」

「察しが悪いな、全識衛護。このあと時間が空いているのなら、暇を潰さないか？ とくくりが訊いているんだ。そう、くくりがな」

男の声が衛護とくくりの会話に割つて入る。その男は窓際に突つ

立っていて、サングラス越しから衛護を見つめる。金髪が時々窓から入り込む風に煽られて揺れていた。

「そんな嫌味に聞こえるようなこと言わない！ 倉が、意地が悪い子に見られちゃうよ？」

「別にいいさ、俺はそういう風にクラスのみんなから思われてるんだから。周知の事実じゃないか」

「なんで、倉はいつもそうなの！ 可愛げのない子！」

「……くぐりがいてくれさえすればいいんだよ……他の人間なんて要らない……面倒なんだ……人間関係が……」

小さな声で呟く倉は、サングラスを掛けていてもわかるほど儚げな貌をしていた。その言葉は誰の耳にも届くことはなかったが、衛護だけは彼の秘めたる思いを感じ取った。

オレンジ色の教室に深い沈黙が訪れる。静寂を破ったのは衛護だった。

「どうですか宿和さん、一緒に行きませんか？ 彼らは優しい人たちです。僕が保証します。一度でいいですから、僕以外の人間を信じてみたらどうですか？」

ぴくりとも動かない宿和の貌を見て語りかける。

わかつてはいた。衛護がどんなに説得してみても人間そのものを忌み嫌う彼女が、うんと、応じるはずはない、と。

集星学校に来たことですから大きな進歩であり凄いことなのに、これに人の付き合を付加したら、宿和は絶対に首を縊に振らない。再び沈黙が教室を支配した。

宿和の貌からほんの僅かな機微を察知する。

「……ですか、わかりました。すいません、倉君、くぐりさん。誘ってくれてありがとうございます。今回は遠慮させていただきます」

「いえいえ、こちらこそ無理言つてごめんね。なんか気を使わせちやつたみたい」

笑顔で話すくぐりだが、肩を少し落として残念そうにしてい

た。

「こればっかりは衛護が出来ることなど何もなかつた。宿和を強引に連れて行くというもの気が引ける。嫌がつてゐる彼女を連れていけば、くくりたちに氣を遣わせてしまうだろ。」

親切で誘つてくれた彼女たちに、その親切を踏みにじる行為はしたくなかった。

「また、誘つてください。それでは今日は失礼します。また明日」無言で立つてゐる宿和の手を取り、衛護は教室をあとにする。

下校途中でくくりと別れて家へ帰つてきた倉は、だだつ広い屋敷を迷うことなく進み、とある部屋の前へとやつて來ていた。

「コンコンコン」と高級な木造のドアを、倉はいつも通りに叩く。扉が開かれる合図はノックを三度。それ以外では中の住人は決して開けない。

「入れ」

扉の向こうから、低い声がする。腹の底から震え上がらせる声色。いつ聞いても慣れることはなかつた。

ここに訪れるたびに、倉は緊張で手に汗を握つてゐる。本当は彼の部屋になど入りたくはなかつた。でもそんなことを許す彼ではない。

逆らうことを絶対に許さない、人を権力で屈服させる人物。彼は集星市を牛耳つており、政治の世界に深く係わり合いを持つてゐる。久々津家の現当主にして、今も現役の一代目の魔術師。そして、久々津倉の父親であり魔術師の師でもある。

久々津遜業には願望があつた。

権力があるとはいゝ、叶えられる夢とそうでないものどがある。遜業の叶えたかつた願望は、人類の頂点に立つといふ子供が考えそうな幼稚なもの。

それを本気で成し遂げようとしているのが遜業といつ男だ。

彼の力だったらこの国を簡単に治められるだろ。でもそれが限界。彼の野望は人間が行える限度を超していた。

だから遜業は、非現実的手段で手に入れようとしたのだ。

魔術。

権力で總てを解決してきた彼が超越的なものに縋るのは、権力だけでは叶えられない夢だとわかつてしまつたからだろ。

自分の我欲を押し通す人々津遜業が、願望ねがいを諦めるはずもなく、どうやつたら叶えられるか思考を凝らした先が魔術だつた。

「失礼します」

一度深呼吸をし、ゆっくりとドアを開けて中に入った。

「報告をしろ。速やかに」

部屋は豪奢な造りになつており、様々な種類の調度品が壁に飾つてあつた。

どこの國のものはわからぬが、金粉が所々塗してある青色の壺や、精巧に作られた家具や道具、色や形の違つ武具や防具の他に、古代から現代に到るまでの兜や鎧、更には大きさの全く違つ仮面などが部屋中を埋め尽くしていた。

久々津遜業は広いデスクに肘を突き、顎に手を乗せて座つている。脚が沈むぐらいうらかなカーペットを歩きデスクの前に来ると、倉をじろりと睨めつける。気を付けの姿勢で立ち止まつた。

遜業は普通の眼鏡と違いレンズがひとだけの片眼鏡を掛けている。長い髪は後ろで一房に纏め、まだ五十代だといつのに髪は完全に白髪だつた。

「はい。今日は、いつもと変わらず……、いや……」

「どうした?」

「いえ、なんでもありません」

「何か変わつたことがあつたら言つよつこと、躊してあつたはずだが?」

「はい、わかりました」

父である遜業に、一日の出来事を仔細に伝えるのが毎日の口課。学校での詳細を總て伝え終わると、元々鋭かつた目付きが眼光だけで人を殺せるほどの鋭利なものに変わる。

「何……？ 全識だと？」

「はい、そうです。二人とも転校生で、兄の全識衛護は洋服店で見かけましたと、以前お父上様に伝えました。ただそのときは名前がわかりませんでしたので、男と表現しましたが」「クククつ！ フハハハハ！ そうか、天はわたくしに味方してくれたのか」

突然、口元を厭らしく歪めて笑う親の姿に、倉は不気味さよりも驚きを隠せなかつた。彼があんな風に声を上げて笑つたところなど見たことがなかつたからだ。

興味を惹かれ、疑問を口にしてみる。

「何かいいことでもありましたか？」

「お前が知る必要はない。もう用はない、立ち去れ」

「はい、わかりました」

「いや……アイツに全識家のことを話しておいたほうが、今後いいかもしけぬ。監視するにあたつて理解をし易くするために、な……。おい、俟て、お前」

帰ろうとする倉を、遜業が呼び止める。何の疑問も持たずに振り

返り、「はい、なんでしょうか」

「こつちに来い。まだ話は終わっていない」

「わかりました」

言われたとおりに遜業の前に来る。居住まいを正し、彼の話を聞く。

「お前に言つておくことがある」

「なんでしょうか？」

ニヤける口元を隠そつともせず、遜業は話し出す。

全識家は歴史の長い魔術師の家系で、上位に入るぐらい有名な魔術師の一族。彼らはある存在に立ち向かうべく魔術を探究していく

た。それが、？運命？の存在。

運命がある限り、たとえどんな生物だろうが逆らえない。人間は運命が敷いたレールを歩いているだけの、人形に成り下がっている。その呪縛から解放されるには、魔術の力を以てして他にない。

そこで全識家は運命に抗うべく黄金釜（*all of the world*）を造り上げたのだ。

「わたくしが欲しいのは黄金釜（*all of the world*）だ。總てが極秘だから、どんな姿形をしているか知らぬ。ただ全識家が持つていることだけはわかっている」

「その、黄金釜（*all of the world*）というモノをお父上様は欲しているのですか？」

「ああ、そうだ。しかも全識一族は何者かによつて滅ぼされたと報告が入つてゐる。つい最近の話だ。ところが、生き残りがいるとうではないか。ククク」

「それが全識衛護と、全識宿和ですか……。あの、お父上様。お差支えなれば訊きたいのですが」

「なんだ……？」

先程まで笑顔だった遜業が、表情を崩し厳格なものへと変える。鋭い眼光が、ぎょろりと倉に向けられた。息子を見る目ではない。赤の他人の子供を躊躇するようだった。

倉は、でも好奇心が勝り、遜業に一発殴られる覚悟で質問する。「黄金釜（*all of the world*）とは、一体どういったモノなんでしょう？」

全識という言葉に過剰反応し、そして今まで見せなかつた父親の笑顔。ただ事ではないに違ひなかつた。

黄金釜（*all of the world*）を求める理由が知りたいのは当たり前である。

「いいだろう、特別に教えてやる。黄金釜（*all of the world*）とは、全識家の魔術師が愚かにも自分の命と引き換えに膨大な量の魔力を注ぎこんだ釜のことだ。その釜を使えば奇蹟

を簡単に起らせる。わたくしの願望ねがいを成就させるために、黄金釜（*all of the world*）が必要なんだ」

なるほど、遜業が喉から手が出るほど欲つしているのも頷ける。黄金釜（*all of the world*）とやらがあれば、人類の頂点だけでなく、ありとあらゆる靈長類の頂点にさえも立てるだろう。

「但し彼の夢は、得てしてやつと叶う夢である。だから、

「言いたいことは判るよな？　わたくしは政治で忙しい。だからわたくしに代わってお前が全識兄妹を監視する。わたくしのような年老いた者が傍に寄つたら不審がられるからな。お前が仲良くなつて彼らの情報を手に入れるのだ。まだソイツらが全識家の生き残りだとは決まってないからな。とりあえず、様子見だ。何かまた変わつたことがあつたら伝えろ。　以上だ。出て行け」

「……わかりました。失礼しました」

行儀良く一礼し、倉は遜業の部屋をあとにした。

「どうして……どうなった……」

段々と自分がしでかした過ちを思い知ることになった。

罪悪感、緊張、恐怖がこぢや混ぜになり、久々津倉はベッドにつ伏せ、悶々と時間を潰す。

頭に掛けていたサングラスを取り外し、ベッドの横の台に置く。長い髪をかき上げて、消化のしきれない思いを言葉に出していた。「どうして。どうして俺はあのとき、父親に転校生の話を持ち出した。なんで彼らのことを話したりしたんだ。何の罪もない人間を、父親の悪事に巻き込ませてしまったんだぞ……ツ！　バカか、俺は！」

やり場のない後悔の念を、握りこぶしを作つてベッドに叩きつける。ぽふつと虚しい音が響くだけで、後悔は消え去らなかつた。「いくら全識衛護が憎くたつて、やつていいことと悪いことはあつはずだ！　なのにどうして歯止めを利かせなかつた！　父の手に

かかつたらあいつらは死んでしまう。そつなつたら全部俺の責任だ。そんなことを宿和に知られたら、彼女は……ッ！ 彼女はきっと俺を嫌いになってしまいます。

もう一度ベッドを殴りつける。

何か気に食わないことがあつたから、倉は父に話した。一体何が……。

転校生がちやほやされていたからか？ いや違う。

じゃあ、北村先生の標的にされたからか？ それも違う。
自分で言つていたじゃないか、憎かつたって。 何が憎かつたんだ？

「ああ、もしかして俺はイラついていたのか、あいつに」

くくりと仲良くしていた全識衛護が不快でしかたがなかつたのだ。何故、ここまでむしゃくしゃするのか自分でさえも倉はわからなかつた。獣のような荒々しい感情が心に住み着き、倉を苛んでいた。「失礼致します。つてあれ？ 倉様、いないのでしょうか？」

真つ暗闇な室内に明かりが燈る。

いきなりの光源が目に染み入り、倉は両腕で塞いだ。

「あっ！ すいません、たびたびの失礼をお許しください」「いや、大丈夫だ。いることを伝えなかつた俺の方が悪い。奈々（なな）が悪いわけじゃない」

ベッドから起き上がり、淵に腰を下ろす。サングラスを掛けて、声のした方向を見るとそこには、メイド服を着た女の子。

咲璃奈々はカチューシャを頭に付け、エプロンをしていた。

彼女は喫茶店のメイドとは違つ、本格的なメイドだ。久々津家のメイドとして迎えられたのは、倉がまだ六歳の頃。当時の奈々も倉と同い年の六歳。その頃から久々津家の厳しい躰を受け、彼女は心身ともに忠実な女中として育てられた。

そして、彼女は努力に努力を重ね、倉の専属メイドとして今に到

る。

ペニペニと何度も頭を下げる姿が可愛らしかった。先程の悶々とした感情が、彼女を見ればほぐされていく。

「逆にお礼を言いたいぐらいだ。ありがとウ……」「

「いえいえ、じゃなくて……ど、どうかしたんですか、倉様」「

「いや、なんでもない。こっちの話だ」「

笑顔を向けると、頬を赤く染める奈々。季節のよつひにひるむ変わら彼女の貌が可笑しくて、倉は声に出して笑う。

「ど、どうしたんですか、急に…」

「謝つたり貌を赤くしたり怒つたり、忙しないなと思つてさ。それが堪らなく面白くて」

「すいません……」

「別に責めてるわけじゃない。謝らなくいいよ。むしろ、それがチヤーミングポイントだからいいんだ」

そう倉が言うと、悲しげな表情だつたのが、ぱっと花が咲いたように奈々は微笑を讃える。

……女の子は感情豊か。見ていて飽きない。秘かに倉はそう思つていた。

「ごほん！　えっとですね、ここに来たのには理由がちゃんとあるんですね」

「なんだ？」

「ご飯、食べてないですよね！　倉様だけですよ、手をつけてないのは。あとのみなさんは全員召し上がりになりました。ですから、倉様も！」

奈々が運んできたのだろう、トレイを部屋の真ん中まで押す。

トレイの上にある料理の品々を持ち、テーブルの上に並べていく。湯気が立つていた。もしかしたら、奈々が倉のために作り直したのかもしれない。

心遣いはとても嬉しかったが、今は食欲がない。

「「めん、いらない。下してくれ

「駄目です！ 体調が優れないときこのへんを食べたほうがいいんですよ…」

「そんな、気分じゃないんだ…」

ベッドの上で頃垂れている倉の許へ奈々はいそいそとやつてくる。

隣に腰掛けると、ベッドが彼女の重みで軋む。

本当は一人にして欲しかったのだが、出て行け、と奈々に強く言えるわけがなかつた。

「一体どうしたというのですか？ 悩み事なら聞いてあげますよ？」

「大したことじゃない。だから気にしなくていいよ」

「言つてください。……じゃないと、あれ、片付けられませんから」
奈々が指さしたのは、料理の数々。目を閉じて笑う彼女がとても怖い。どうしても食べて欲しいらしい。けれど、一向に腹の虫は鳴る気配がない。

不意に手を奪われる。倉の手を、彼女の両手が優しく包み込む。柔らかい手から伝わる温もりは、暖かくて気持ちよかつた。

どんなときも奈々は倉を励まし、悩みに真剣に耳を傾け、過ちを犯しどきは厳しく叱咤してくれた。それはメイドというよりは、幼馴染みのような関係。むしろ幼馴染みだと、倉は思つている。呼べばいつだって直ぐに彼女は駆けつけてくれた。

奈々の温もりに何度助けられたことか。

でも、甘え続けていたくなかった。このまま甘えていたら、きっと自分が駄目になる。

迷惑はかけ続けられない。倉だつてもう高校生なのだ。大人にならなければならない年頃。人を頼ることは止めて自立したい思いがあつた。

「黙ついていてもわかりませんよ？」

「だから、なんでもないって。気にするな」

そう倉は言つて、彼女の手を振り解いた。ベッドに横になろうかとも思つたが、奈々がいるため断念。仕方なく部屋の中央に向かい、テーブルの椅子に腰掛けた。

テーブルの上の料理をぼーっと眺めていると、声を掛けられる。

「倉様がどう思つてるかは知りませんが、私は心底心配してゐるんですよ？」

「奈々がそこまで気にする必要はないだろ」

「だつて……。私は……」

「私は？」

「私は、貴方様のメイドです。あるじの体調管理が私の役目。もし倉様が病気になつていたら、總て私の責任になります。ですか、倉様がご飯を食べない理由を知らなければなりません」

奈々の力強い瞳に見つめられ、倉は言おうかと迷い始める。

先程までの決意は崩れ始め、彼女に悩みごとを打ち明けたくなつていた。でも、と倉は踏ん張る。ここで揺らいだら負けだ。

どこかで踏ん切りをつけなければ、この先ずっと倉は奈々を頼りとした生活を送つてしまつ。そうなるのは勘弁。彼女も倉と永遠に一緒なのは嫌だろう。決別しなければならない日が来る前に備えておく必要があつた。

「もしかして、くくり様と何か関係がありますか？」

「……ツ！」

奈々とくくりは面識が一切ない。なのに奈々が知つてているのは、倉が彼女にくくりの話をしたことがあつたからだ。

何故くくりが関係しているとわかつたのだろうか。図星を指され、室内はエアコンが効いて涼しいはずなのに、額からは大量の汗が吹き出していた。

「その反応は、当たつてますね？」

「違う……、いや、そうだ。どうしてわかつた……」

弁解しよとしたが、それが虚しい抵抗だとわかり止める。

「倉様のことですもの、絶対にくくり様の話だらうとわかつてしましました」

「そうか、そんなに判りやすいのか、俺は」

「はい。くくり様が大好きですものね、倉様は……」

『くくりが大好き』という言葉を聞いただけで、貌がかつと熱くな

る。動搖のしずぎで、浮き出る汗は止まる気配がなかつた。

何を言つてゐんだ！ と、なけなしの意地を張つて反論しようとすむ。けれど、奈々の表情を見てしまつたら、声に出せるはずもない。

唇を強く噛み眉根を寄せた表情は、苦しんでいるようだつた。

「……いつもそうでした。倉様がお話されるのは、くくり様のことだけです」

「そんなことはないだろ。てか、好きなわけがねえ」

否定するが奈々は首を横にぶんぶん振つて、そんなことはない、と言つ。

「……ッ！ 奈々なんかにわかるわけがないだろ、俺の気持ちなんて！」

精一杯の虚勢を張つて、声を張り上げる。自分でも情けないとは思つても、そうせずにはいられなかつた。

倉の気持ちをわかるはずがない。ましてや、赤の他人の奈々が。いくら長年付き添つてきた彼女だからといって、倉のこと全部を知り尽くしていいるはずはないのだ。

「分かりますよ！ 倉様がくくり様の話をするときは、いつも笑顔でした。楽しそうにくくり様のことを聞かせてくれるじゃないですか！ それは、好きだからですよ。なんで気付かないんですか、自分の想いを……」

「だつて、それは……ッ！ あいつが、面白いいやつだから……だ。これ以外に理由はない！」

「話の種にもならない人だつているんですよー！」

初めて見る奈々の怒つて泣いている貌。今まで溜まつていた内なるものを、総て出し切つたようだつた。

ポツポツと流した涙が真っ白いシーツに滲みを作つていいく。両手で涙を拭うが、次々と瞳から大きい粒があふれ出でてくる。

「『めんなさい、大声だして……』

「あ、いや。俺も悪かつた。そつ……だよな。奈々の言ひとおりだ。話題にも上がらない人間は、要するに興味すらないって奴つてことだもんな」

倉は自分のクラスメイトのみんなから恐れられている。政界の有力者の息子に自分から仲良くなりたいと思う輩はいない。彼に危害を蒙つたら、その危害を加えた人物の家族全員は殺される、と生徒たちの間で噂になつてゐるからだ。

事実は嘘であり、たとえ倉が遙業に獻なことをされたと告げても相手にはされないだろう。彼が全権力を持つてゐるため、本当に殺害しようと思えば簡単にやつてのけるは確かだ。

更には魔術師の家系ときた。当然、関わり合いすら持ちたくないが普通。

だから倉から仲良くしようと思つたことはない。彼らは倉にしてみれば、空氣も同然の扱い。自分から拘つても得になることもないし、むしろ損である。だつたら一匹狼でいるしか他にない。でも、そんな倉に優しくしてくれたのがいた。

それが雑末羅くくりだつたのだ。

「だからって、何故奈々が怒る？」

「倉様がズルイからです。そうやつて気もないのに私に優しくするからです！」

……俺は奈々に優しくしてゐたか？ 今だつて奈々を悲しませて、しかも泣かせる原因すらもわからないままである。そんなやつが絶対に優しいはずがない。

ますます奈々の言いたいことが見えてこない。彼女がどうしてここまで感情を露にするのか。やはり奈々本人の口から言われないと、自分のことすらも知らないのか。

「優しいか？ 迷惑ばかりかけて大変な目に遭つてゐるじゃないのか？」

「いいえ。倉様はメイドである私とこうして話してくれてます。そ

れは優しい人だからです」

「普通だろ、話すのは……」

そう倉は言つと、首をゆづくりと横に振つて奈々は否定する。彼女は目を赤く晴らしながら、無理やり笑顔を作り出していた。「女中とは本来あるじの下で働く奴隸。あるじの言つとおりに動く機械のようなものなのです。ですから、機械に話しかける人間などいません。そういうものなんです。なのに倉様は、なんの気兼ねもなく私とお話してくださいました」

「俺と奈々は、幼馴染みみたいなものだろ？ メイドだからとか、身分が低いからって無視するわけないだろ」

「幼馴染み……ですか。やつぱり幼馴染みでしかないんですね……」

小声で奈々が言つので、何を言つたのか聞き取れなかつた。

ベッドをぎゅっと掴み、彼女は悲しげな表情をする。

どうやらまた奈々に酷いことをしてしまつたようだ。こんな奴が本当に優しい人間なのだろうか。

「それで！ くくり様とどうかされたんですか？ 相談に乗つてあげます」

声を張り上げて、奈々は話を強引に戻した。

倉の悩みを聞くまでは帰らないつもりでいるらしい。

奈々の優しさに感謝し、倉は口を開く。

「俺一人で解決できないほど事態が発展してしまつたんだ……」「つまり、どういうことですか？」

「俺は、罪のない人間を巻き込んでしまつた。お父上様の悪事に、俺は加担したんだ。どうしてそんなことをしたのか、今やつとわかつたよ。奈々のお陰で……」

くくりが衛護と仲良くしているところを見ると、抑えられない怒りが沸騰してしまつ。

倉の人生の中で初めての経験だつた。

くくりが誰と親しくしていようとなんともなかつたのに、何故か衛護と楽しそうに会話しているのを見ると、胸の奥がイガイガして

氣色悪い。

この感情が嫉妬だと気付いたのは、奈々が倉はくくりのことを好きだと指摘してくれたお陰である。

自分でさえも分からなかつたくくりに対する気持ちを、彼女は的確に当ててくれたのだ。

「自分がしでかした過ちを、くくり様が知つたら嫌われると思ったのですね？」

「……ッ！　うん、奈々の言うとおり。何でもお見通しなんだな」「好きな人から嫌われたくないです。誰でもそうです。だから、倉様があんなにも苦悩していたのですね」

奈々に諭されて倉はただただうん、と頷くしかなかつた。彼女に相談してよかつたと、倉は思う。一人では抱えきれない悩みだったが、誰かに打ち明けたことで、すーっと心身共に軽くなつたような気がした。

「もう、後戻りできないんだ。どうしたらしい……」

ベッドから離れ、倉の座つている席へ奈々は来て肩に手を乗せた。その手の温もりに安堵しながら、倉はふーっと深い息を吐く。

これから起つてゐるであらう悲惨な事態に、今から倉は悒鬱な気分になる。

「落胆していも仕方がないです。過ぎ去つた過去はどうやつても変えられません。ただし、これから先は別ですよ、倉様」

彼女の声が沈みゆく倉の気分を安らかにしてくれる。奈々がいるから、倉はどん底にならずに済んでいるのだ。

「まずは、くくり様に第一に伝えるんです。自分がしでかした間違いと、そして、自分の気持ちを」

「そんなことしたら、俺は嫌われてしまつ」「恐れてどうするんですか！　彼女は大切な人なんでしょう？」「うん……」

「だったら！　嘘を付き続けたままでいいんですかッ！　好きな人まで騙すつもりなんですか……？」

肩に置いてある手の力が強くなる。皺ができるほど服をぎゅっと握り締める奈々。

彼女は怒ってくれているのだ、倉のために。倉を心配してくれるから、こんなにも感情を露にするのだ。

肩に置かれた奈々の手を、倉の手が優しく包む。

「嘘も、騙すつもりもない。もし俺がくくりにそういうことされたら嫌だ。自分でされいやなことはしない。だから言つよ、奈々」「倉は振り返り、真っ直ぐ奈々の瞳を見つめる。己の本気が解るよう」。こんな駄目駄目な自分に彼女は、柔軟な笑みを浮かべる。それを見ただけで不思議と勇気が湧いてくる。

「くくり様なら絶対、許してくれます。その代わり、たっぷり叱られることがあります」といいます、覚悟しておいてください」

「ああ、そうだな。うん、一発殴られる覚悟でいる。いや、むしろ殴つてもらいたいぐらいだ。こんなしょうもない奴の田を覚ましてもらいたい」

くすくすと声を上げて笑う奈々を、不審げに見る。

「どうかしたか？」

「くすつ。いえ、お冗談を言える、いつもの倉様に戻つてくれてよかつたと思いまして」

「これも奈々のお陰だ。ありがとう」

「どういたしまして。でも、感謝するのはまだ早いです。總てが丸く収まらなければ意味がありません。くくり様のことは一応解決しました。けれど、罪のない人たちはどうするつもりですか？」

意識がくくりに向いていたため、肝心なことを忘れていた。一番の問題は彼らだ。全識衛護と全識宿和。厄介なのは、遜業が彼らに狙いを定めたことだ。彼は自分の願望^{ねがい}が叶えられるならば、衛護と宿和を殺すことになるの躊躇いも持たないだろう。

むしろ殺しても自分の野望を成し遂げようとするはずだ。今は、彼らが全識家の生き残りだと解らないから手出しあしないが、それも時間の問題。

彼らが全識家の生存者だと知れたら、命はないものと思つていい。自らの権力を使って警察の力を頼りにするかもしれない。そうなる前に、総てを解決しなければならなかつた。

抱えている問題は多すぎて、でも、やらなければいけなくて。そんな心の葛藤を見透かしたのか、あるいは貌に出ていたのか、奈々は微笑みかける。

「大丈夫です、そこまで深刻になる必要はないです。心配は要りませんよ」

「そう言い切ればいいんだけどな。今回の場合、お父上様が関与している。簡単にことが運ばない」

「でも」

「奈々の言いたいことは判つてる。だから平氣だ、約束は守る。俺は男だ。一度言つたことは取り消さない。くくりに俺の本当の気持ちを伝えるよ。そして、全識衛護と全識宿和を助ける。絶対に……！」

倉は声を張つて奈々の言葉を遮つた。嬉しそうにへりつと笑う彼女に、

「どうかしたか？」

「いえ、倉様がやる気になつてくれて喜ばしかつたので」

彼女はメイド以上の存在だ。幼馴染みといつ枠組みから外れている。

倉が七歳の頃に病氣で亡くなつてしまつた久々津節^{ひせ} 母上の面影と、奈々が重なる。

今もまだ節との思い出を覚えている。

遙業に叱られて泣いてしまつたとき、母の許に行つて慰めてもらつていた。柔らかい母上の掌が倉の頭を優しく撫でてくれるだけで、倉を元気にさせる力があつた。

節は喪つてはならない人間だった。けれど、もういない遠い過去の人。

でも、今は母の代わりに傍に奈々がいる。

そう、奈々は母親と同じ匂いがしたのだ。彼女の体臭を指しているのではない。同じような雰囲気を身に纏っているのだ。だから母親みたいだと倉は思ったのかもしねない。

「なんかお腹が減ってきた。やる気が出てきたからか。手間かけてすまないが、もう一度料理を温め直してくれると助かる」

「はい、わかりました」

胸の前に両手を添えて静かに礼をすると、テーブルの上に置かれていた料理の品々をトレイへ持つていく。

もう一度倉に向かつて丁寧にお辞儀すると、トレイを押して部屋から出て行つた。

* * *

太陽の光で目を覚ますと、衛護はむくりと起き上がり、両腕を天井に向かつて伸ばした。

貌を横に向けて台の上の時計を見る。時刻は六時を少し回つていた。今日は日曜日だから慌てる必要はない。

「学校が始まつたら、この時間帯に目覚ましをセットしておく必要がありますね……」

無事、次の日になる。一族を襲つた犯人からの追撃は以後皆無。昨日くくりたちと別れてから、宿和は一度たりとも衛護と話さなかつた。人がいなければ口数の多い彼女だが、家の中にいても無口のまま。理由を問い合わせても無言を貫き通す。一体何があつたのか解らないまま朝を迎えてしまつたのだ。

その当の本人は、スーパーと可愛らしい寝息を立てて、衛護の隣でぐつすり寝ている。

狭いベッドに一人で寝るのは、やはり無理があり、衛護は一睡もできなかつた。幾度となく宿和と一緒に寝たことがあるため、女子と寝るのは何とも思わない。むしろ、一緒に寝ないと落ち着かない。襲撃者から安全を護るためにには、近くにいなければならぬとい

らだ。

朝日が窓の向こうから差し込み、宿和のきめ細やかな肌を浮き彫りにする。光りに透かした銀髪は、ベッドのシーツの色までをも鮮明に映すほど色素が薄い。

髪を撫ると、瞼がゆっくりと開かれる。黄金色の大きな瞳が、衛護を見据えた。

「う……んつ……。もう朝？」

「はい、そうです。大丈夫ですか？」

「……」

声には出さなかつたが、首を縦に振る。どうやらまだ本調子ではないらしい。

パジャマの裾で目をこじこじ擦つて、彼女はベッドから這い出た。昨夜からずっと握り締められていた手をやっと宿和は離す。手が少し赤くなっていた。

「ご飯食べますか？」

「うん、食べる」「うん、食べる」

短く告げられた言葉を聞き取り、衛護はまた宿和の髪を梳いてやる。まるで猫のように目を細めて彼女は気持ちよさそうにする。機嫌が直ってきたのか、少しずつ話すようになつてきた。それを良しとし、衛護は寝室から出て居間に向かつ。

台所へ着くと、直ちに料理の準備に取り掛かつた。

手際よく材料を切つたり、焼いたり、茹でたりしてあつという間に冷やし中華の出来上がり。

プラスチックの皿に盛り付けて居間に急いで持つていくと、正座して待つていた可愛らしい宿和の姿が。食欲だけは相変わらずあるようだ。食欲がないと言われたら、心配になるところだつたけれど。テーブルの上に皿を置くと今にも手でがつつきそうだつたので、衛護は慌てて台所に戻り、割り箸を持ってくる。

宿和に渡した瞬間、いただきますも言わずに割り箸を二つに割つて食いつめる。

「そんなに焦らなくても料理は逃げませんよ?」

「いいの! お腹減ったんだから!」

「麵を何本も箸で掬い上げて、じくじく食べる、といつよりは飲み込む。」

あつという間に麵が半分なくなつていった。次々と食されていき、宿和が食い始めてから五分とも立たずく料理が全滅する。

そのあまりの速さに、あいた口が塞がらなかつた。

「どうしたの? 変な顔して」

「……え、その。空腹だったんだなあと思いまして」

「うん、かなり。つて、もしかして、食欲ないの? なんなら私が食べてあげようか?」

言い終わるよりも早く宿和は衛護の冷やし中華目掛けて腕を伸ばす。直後。

「宿和さん、隠れてください!」

衛護の突然の叫び声に、宿和は伸ばしていた腕を引っ込めてテーブルの上に箸を置く。

「どう、したの?」

「使い魔からの情報で、このマンショングの住人ではない男が今入つたようです。もしかすると襲撃者かもしません。男が来る前に身を隠してください、早く!」

表情は相変わらず無表情だけれども、普段だしたこともない大声で、衛護の動搖が宿和に伝わったはずだ。瞬間に彼女の貌が恐怖の色に染まる。ぎゅっと首許の、

食事を一時中断する。一時ではなく永遠になることだけは願い下げ。

居間を出て奥の部屋までやつてくると、宿和をそこに閉じ込める。ピンポーン、ときどきチャイムが鳴る。

「呪文 (s o e l l) 固定時間 (fixed time)!」

小さな掛け声と共に、指にしきつと前よりも鋭い痛みが走る。魔術を扱つたことによるフイードバックだ。自分の手を見る。右手だ

けでなく左手にもあの、蒼い痣（stigma）が指に浮かび上がっていた。これで合計八つ目だ。

「ねえ、まさか……。また魔術を使ったの？ あれほど使つたら駄目だつて忠告したはずだよッ！」

宿和の悲痛な叫び声が聞こえる。

無理やり抉じ開けようと叩いたり引いたりするが、扉はびくともしない。

今度の魔術は扉全体にかけていた。以前扉にかけていた魔術とは違い、下位魔術の中でも割と強力な魔術で、本当なら合計五つ目の青い痣になるはずが、痣は三つ代償としたのだ。

衛護が得意とする魔術は時間系統。物であるならば、その物の時間を見早めることも、戻すことも、遅くすることも、止めるることも出来る。

発動した魔術は、時間を止めるというも。氷のように固まつた扉を開けるには、物理的に難しい。もちろん魔術でも同じだ。

「いいですか、宿和さん。よく聞いてください。もし僕一人で太刀打ちできなかつたら、そのときは逃げてください。窓の外に使い魔を用意させておきますから」

優しく囁きかけ、衛護はその場を後にする。

玄関へと続く廊下に出ると、腰にぶら下げている銀色の鉛　スミス&ウェットソンを取り出す。

レバーを押して、弾倉に弾薬があるか確認する。充分に弾薬が詰まっていた。弾倉を再度装鎮して、安全レバーを外す。スライドを引いて、弾薬が薬莢に入ったのを音で聞き、グリップを握り締める。

同じようにもう一つの拳銃　デザート・イーグルにも撃てる準備だけはしておく。デザート・イーグルの方は懐に仕舞い、いつでも取り出せるようにする。

スミス&ウェットソンはサイレンサーが付いているため、今回使用することにした。近隣に気付かれぬようにという配慮のもとだ。だとえ発砲するようなことになったとしても音は小さいから、大騒

動にはならないだろう。但し、いくらサイレンサーが付いていても完全に音を遮断することは出来ない。バレるのは時間の問題である。

再度チャイムが鳴る。拳銃を握り締める力が強くなる。

「はい、どちら様でしょつか？」

『宅配のものですがー』

「そうですか、少々お待ちください」

使い魔からの視覚情報を通して見ると、玄関の前に一人の男が立っていた。段ボール箱を両手で持つて、衛護のことを待っている。どうやら本当に荷物を届けに窺いに来ただけのようだが、衛護には心当たりが一切なかつた。商品をネットやスーパーで頼んだ覚えはない。宿和が注文したのかもしぬないが、それなら、彼女が買つたと教えてくれるだらう。

居留守を使つてもよかつたと衛護は後悔する。だがもう遅い。いることを伝えてしまつたからには、出なければ不自然だ。相手がもし衛護たちを狙つていた襲撃者なら、玄関の扉を突き破られるかもしれない。そうなつてからでは間に合わない。

先手必勝、それが衛護の戦闘手段である。こちらから仕掛けてしまえば相手の意表を突ける。襲撃者が魔術師ならば、呪文に掛かる時間を狙い、先に叩きのめせるからだ。そうなれば衛護の勝ちは見えてくる。

たとえ衛護の制止を振り切つて宿和を襲おうとしても、衛護との一戦で、宿和を逃げさせることが出来る。

衛護は鍵を開けて扉を放つ。右手にもつた拳銃は、後ろに廻して相手の視覚から隠した。

相手が魔術を発動するイミングだけを狙つて撃つ。その瞬間を待ち続けねばいい。

「遅くなつてしません」

「あ、いえいえ。えつと、全識さんでよろしいですか？」

「……はい」

自分でも驚くほど低い声を出して、相手の質問に答える。

緊張の一瞬。

相手が自分を衛護だと知つたあと、どう行動するのか出方を見極めなければならない。全神経を集中させる。腕に力が入りすぎて、握っていた銃を壊してしまうのではないかと心配になる。

「あの、では荷物の方は……」

「置いておいてください」

衛護の指示で、人一人分が入れそうな大きさの段ボール箱を、床に置いた。

男に注意がいきがちだが、一番怪しいのはこの箱の中身だ。ここに誰かいたのなら、一体一で戦わなければならなくなる。そうなると厄介だ。

一族を襲つた犯人が一人だとは聞いていない。むしろ複数の魔術師がいたのではないかと、衛護は推測している。複数の魔術師がこそつて発動したのなら、一瞬にして一族を滅ぼしたのも理解できる。あのとき、強大な魔術を衛護は感じていたのだ。殺しに来たのだと分かるには十二分に過ぎるほどに強力な魔術の塊が、屋敷へ目掛け放たれた。恐らく中位魔術　否、上位魔術に匹敵する呪文だろう。

「それでは、失礼します」

一言告げてエレベーターの方へ歩む、男。

玄関の前に残されていた段ボールを見下ろし、そして、男を注視する。

エレベーターのドアが閉まり、男を乗せたエレベーターは徐々に下がっていく。一度も止まることなく一階に着くと、ランプが点滅した。

共有した使い魔の視覚で、男が路肩に止めてあつたトラックに乗り、走り去つていくまでの光景總てを見届けた。

念のためにトラックに使い魔を尾行させて、三百メートル付近まで遠のいたら帰らせるよう命令しておく。
まだ安心してはならない。

段ボール箱の中身がなんなのかまだ分かっていないからだ。

この中にもし男の味方がいるとしたら、その男と合わせて衛護と戦いに持ち込むのが普通だろう。一人でかかってこられたらいくら衛護でも太刀打ち出来ない。でもそうしてこなかつた。ということはここに人はいない。

人ではなく使い魔、あるいは爆弾といった殺傷能力の高い物が入っている可能性があるから危険性はまだ残っている。

「なんですかこれは……」

疑問を口に出さずにはいられなかつた。

段ボールの真上に張られた用紙には、？集星学校から、鈴内校長より？と手書きで書いてあつた。

「……学校？ どうして校長先生が荷物を配達したんですか……」「まさか、と頭の片隅に嫌な予感が過ぎる。

「あの優しげな人が一族を襲つた真犯人だというのですか……？」

かぶりを振り、妄想めいた考えを追つ払う。

人は見かけによらないとは言つが、あんなにも優しい先生が一族を殺した殺人鬼だとは到底思えない。確かに、学校へその日の内に入学させてくれたのは怪しい。けれど、それは善意であつて、決して悪意は校長先生の貌から窺えなかつた。

どのみち開けて見てみない限り、解りようもないことだ。

校長先生に対する不信感は未だにあるものの、中身を確認したいという気持ちの方が圧倒的に強かつた。

その不信感も、段ボール箱を慎重に開けて中を確かめると、安堵に変わる。

「そういえば、そうでした。自分としたことが、まさか忘れていることは……」

中には集星学校と刺繡された制服が、綺麗に置まっていた。男性用だけでなく、女性用の制服もある。

今はつきりと衛護は思い出す。

鈴内校長は明日 正確には今日、制服を用意してくれると言つ

ていた。そのことを衛護はすっかりと忘れていたのだ。

登校日に間に合うように、校長先生は親切にも制服を宅配便で送つててくれたのだった。

頑なに握られていた拳銃を、ホルスターに仕舞う。段ボール箱を片手に担いで居間までやつて来ると、どつと疲れが押し寄せてくる。緊張が緩和したせいだろう、力が抜けていく。

どんっという大きな音を立てて、手から段ボール箱が滑り落ちる。その音ではつと我に返り、奥の部屋へと小走りで向かう。

「呪文（s p e l l） 準則時間（a r u l e o f t i m

e）！」

手に馴染み深い痛みが走った。言わずもがな、それは九つの痣の徵。青色に染め上がっていく手は、自分の手だとは思えない。まるで怪物や幽霊といった、この世のものではない生き物のようだ。魔術で止まっていた扉の時間が、正常な時間軸上に戻される。宿和の反応が全くない。まさか、と不安になり、急いで部屋に入る。

大量の涙を流しながら嗚咽を漏らしている宿和の姿があった。彼女の涙がぽつぽつと音を立てて、座敷の畳に滲み込む。

「…………宿和、さん……」

「…………ぐすつ、衛護…………衛護…………衛護…………。生きてたんだね…………、よかつたあ。本当に、よかつたあ…………」

小さな手の平で懸命に涙を拭き取る。首にぶら下げていたネックレスを、祈るように握り締めている。

うわ言のように衛護の名を呟く宿和を見たら、胸がぎゅっと締め付けられた。

どれほど彼女を不安にさせてしまったのだろう。どれほど彼女を孤独にさせてしまったのだろう。

罪悪感と、やるせなさがじちゃ混ぜになり、気がついたら宿和の許に駆け出していた。小さな身体を引き寄せて、きつく抱きしめる。恐怖からか、それとも安堵からか区別の付かない震えが宿和を襲

つていた。

「ごめんなさい、宿和さん」

「……ううん。衛護が戻ってきてくれただけで、嬉しい
宿和のか細い腕が、衛護の背中に廻される。
まるで、そこにいることを確かめるよ。離れることを許さな
いよ！」。

衛護と宿和は、登校時刻になる寸前まで抱擁していた。

* * *

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1563z/>

All Of The World～それが総ての始まり～

2011年12月5日20時08分発行